

【11月 霜月(しもつき)】

この頃から少しずつ寒さが本格化してきます。同時に野山の木々が赤や黄色に色づく紅葉の月。同時に極寒の地から寒さを逃れて冬を越えようと、白鳥や雁などの渡り鳥が日本にやってきます。またおんみょうどう陰陽道でいうと旧暦の11月が「いちようらいふく一陽来復」という縁起の良い月であったことから、この月に七五三のお祝いをするようになりました。

<11月の行事>

3日	文化の日
7日ごろ	立冬
15日	七五三
23日	勤労感謝の日

七五三とは、11月15日に3歳、5歳、7歳の子どもの成長を祝い、これからの長寿を祈願する日本の年中行事です。

由来には諸説ありますが、江戸時代は関東圏における地方風俗だったものが、やがて京都、大阪でも行われるようになり、だんだんと全国に広まっていきました。

「七五三」という名称から、それぞれの年齢で行う同じ行事のように捉えられる傾向にありますが、実際には別々の異なった行事です。

現代に比べて昔は子どもの死亡率がとて高く、「7歳までは神の子」と言われていました。その名残として、医療が発達した現代でも七五三の儀式があり、とくに7歳の儀式を重視する地方が多かったようです。

現在は、子どもが着物を着て、記念撮影をして、お参りをして、お祝いの食事会を開く、という流れが一般的です。



七五三の意味

3歳・5歳・7歳を節目とした理由は、暦が中国から伝わった際に奇数は陽、つまり縁起がいいとされたため、「3歳で言葉を理解し、5歳で知恵がつき、7歳で乳歯が生え替わる」という成長の節目の歳のためともいわれています。

神事としては、感謝を捧げ祝うことが重要だという考え方から、元々は数え年に行っていましたが、現代は満年齢で行う場合も多いようです。

●3歳＝髪置きの儀(男女とも)

男女ともに生後7日目から3歳までは髪を剃る風習があったため、それを終了する儀式です。これは頭を清潔に保つことで病気の予防になり、その後健康な髪が生えてくると信じられていたためです。

●5歳＝袴着の儀(男の子のみ)

男子が袴を着用し始める儀式です。平安時代に公家階級で行われていた行事になったもので、古くは男女ともに行いましたが、武家では男子のみに行ったため男児の行事となりました。

●7歳＝帯解きの儀(女の子のみ)

女子が付け紐の着物を卒業し大人と同じ幅の広い帯を結び始める儀式です。

ちとせあめ 千歳飴

七五三では、親が自らの子に長寿の願いを込めた「千歳飴」を与えて食べて祝います。

「千歳」という言葉には「千年」つまり「長い」「長生き」という意味があると共に、千歳飴の細長い形状から「細く長く」「長寿」が連想され、「細く長くいつまでも長生きしてほしい」という意味が込められています。

長さは直径約15mm以内、長さ1m以内と決まっており、縁起が良いとされる紅白それぞれの色で着色されています。

千歳飴袋には、鶴亀や松竹梅などの縁起の良い絵柄が描かれているものが多いです。

元々は、江戸時代に浅草の飴売り七兵衛が売り出し流行した「千年飴」から始まったとされています。

現代では、千歳飴の色も、千歳飴袋の絵柄も、様々なデザインのもので作られています。

